

貴重な収蔵品の収集保存のみならず、展示、公開による文化的創造と享受を行う公共的組織として存在する博物館は、知的な社会基盤でもあると考えられる。しかしながら、現在全国に約5,700館を数える博物館は、近年、来館者数は減少し、収蔵品は増えているものの、公開されているのは、最大でも、そのうち約2割程度にすぎない。

こういった中で、本研究は、博物館の収蔵品に注目し、その流動化により高度利活用を目指し、本来博物館に期待されている公共的役割が果たせるようになるための方向性と方法論を探ろうとするものである。具体的には、実際の事例に基づく検討・検証により、次世代博物館におけるオルタナティブ・モデルとしてのモバイルミュージアム方式について、実用的な条件整備及び展開案を提示することを目指した。

そこで、収蔵品の「流動化」に着目した収蔵品の保存・活用方法について、博物館の類型化とオルタナティブ・モデルの検討を行い、また、先進的な取り組みが可能と考えられる大学博物館の状況を検証した上で、東京大学総合研究博物館が実施しているモバイルミュージアムの事例分析を行った。調査対象として、同博物館による3つのプロジェクトを取り上げ、観覧者の利用実態把握と価値意識の変化、アクセス機会の拡大と満足度、観覧者ニーズに関する分析に取り組んだ。その結果、従来博物館に来なかったような観覧者がかなり見られるという利用実態や潜在的ニーズの掘り起こしに対する一定の効果や、モバイルミュージアムに対する肯定的な意見や満足度(異化効果)が確認できた。さらに、仮想的意識調査からは、潜在的なニーズが読み取れたことから、モバイルミュージアムにより、潜在的な観覧者に対して新しい鑑賞スタイルを提供しうることが明らかになった。

さらに、モバイルミュージアム方式の具体的な導入方法の検討を行うために、東京大学総合研究博物館関係者への詳細なヒアリング調査により、当該方式の実現・普及に向けた汎用性の高い実施モデル、タイムスケジュール、条件設定を行った。これにより、モバイルミュージアム方式に指摘される様々な構造的課題点(展示物選定、展示方法や場所の制約等)に対し、解決可能な運用方法を考察、提示した。

最後に、本研究から導き出された結論に基づき、「モバイルミュージアム方式」導入に向けて、今後の課題を、1)モバイルミュージアム方式の成果に関する情報発信および情報共有、2)成功事例の蓄積、3)手法のさらなる確立としてまとめた。

以上、本研究は、博物館の効果的な活用方法として、従来の枠組みから離れ、施設という物理的制約を超えた収蔵品の高度利活用としての流動化に着目し、モバイルミュージアム方式を取り上げ、その具体的な条件整備にまで踏み込み、展開案の提示を行った。